

山中正道先生を偲んで

木村真也

恩師・山中正道先生との出会い

2024年3月12日に明治薬科大学教授・山中正道先生が50歳という若さでご逝去された。誠に恐縮ながら、本稿では恩師である山中先生との思い出を綴らせていただきたい。

私は、論文博士で学位を取得するまで一貫して天然物の全合成研究に取り組んできた。学位取得後は、学位のテーマと異なる、新しい研究に挑戦すべきという強い思いがあり、次の研究について模索していた。そんな中、所属研究室の教授として新たに山中先生が着任されることになった。先生の専門は超分子ゲルであった。ほとんど知識のない分野に飛び込むのは少々戸惑いもあったが、超分子化学は私が関心を寄せる生命現象の理解・制御につながるだろうという思いや、有機合成と超分子化学を基盤とする医薬材料開発へ挑戦したいとの考えから、思い切って研究分野を転じることにした。先生は私を快く受け入れて下さった。

山中先生と出会った2020年4月は、新型コロナウイルスが猛威を振るっていた。緊急事態宣言の発令によりわずか3日で大学が閉鎖され、前途多難なスタートだったが、先生は私に宿題を与え、私のエンカレッジに努めて下さった。宿題は自身のテーマを考え、競争的資金の申請書としてアウトプットすることだった。超分子ゲルに関する実験を一度もしたことがない状態でテーマを考えるというのは大変ではあったが、ど素人の私に初めからチャンスを与えて下さったことが嬉しかった。おかげで、退屈なはずの自粛期間は自分のテーマを練るための良い準備期間となった。なお、ようやく自粛期間が明け、数ヶ月かけて仕上げた宿題は、残念ながら『おもんない』の一言とともに、わずか5分ほどの時間で一蹴された。これ以降、鋭い観察眼を持つ山中先生に、いかに「面白い」と言わせるかが私の目標になった。

山中先生と過ごした日々

山中先生はオープンな性格で、何事も包み隠さず、すべての研究を一緒に取り組ませて下さった。また、若い頃から独立PIとして研究に取り組んでこられた山中先生は、何事も自分の力で取り組ませることを信条とされており、知識も経験もない私に最初からいろいろな仕事を任せて下さった。山中先生の期待に応えるべく、天然物合成で培った根性を唯一の武器に、頑張るか、超頑張るか二択で行動した。研究に真摯に取り組む私を見て、先生も全力で向き合ってくれ、長年培ってきた研究哲学や仕事術を惜し



左：筆者、右：最高の恩師・山中先生

むことなく私に伝えて下さった。一つ一つの仕事が多く、大変だったが、本当に充実した日々であった。一方で、先生とは深夜に馬鹿話をして楽しい時間を過ごした。お互いの考えを包み隠さず話し、将来についてもよく皮算用した。2年ほど経った頃、『最近、議論が成り立つようになってきて楽しい。木村さんを見て、人は根性があれば何とかなるということを実感した』と言われたことは、本当に嬉しかった。もとより対等に接して下さっていたが、この時期からは本当の意味での研究のパートナーとして接して下さったように思う。私はますます超分子ゲルの世界にのめり込んでいった。

山中先生からの最後の宿題

残念ながら、この楽しい時間は長くは続かなかった。元気な印象しかない山中先生だったが、2023年8月に体調を崩され、末期の膵臓がんであることが発覚した。あまりのショックに言葉にならず、2人で泣いた。『研究分野を変えてくれたのに、最後まで面倒を見られず、申し訳ない』と私の将来を心配して下さった。先生は、残された時間で、可能な限り教壇に立ち、最後まで研究を継続することを決断された。私たちは、それから変わらず毎日のように研究の議論を重ねた。気遣い上手の山中先生は、学生や研究者仲間の前では決して弱い姿を見せなかったが、影では想像を絶する痛みと戦っておられた。研究者として懸命に生き抜こうとする姿に、心から尊敬の念を抱いた。しかし残念ながら、長年手掛けていた論文の完成を見ることなく、先生はこの世を旅立たれた。

それから1年かかったが、多くの方に支えられ、何とか最後の宿題となる論文を公表できた（*Nat. Commun.* **2025**, *16*, 3758）。この場を借りて、私を支えて下さる皆様に心より感謝申し上げます。今後も山中先生が認めて下さった根性を武器に、真摯に研究・教育に取り組み、先生に「面白い」と言っていただけの研究に挑んでいきたい。



きむら・しんや
明治薬科大学 講師
〔経歴〕2009年明治薬科大学薬学部卒業。11年千葉大学薬学研究院修士課程修了、12年同博士課程中退。同年明治薬科大学助手。19年千葉大学論文博士号（薬科学）取得。同年明治薬科大学助教を経て、2024年より現職。
〔専門〕有機合成化学、超分子化学。〔趣味〕ボルダリング、登山、トレイルランニング。